

## 「シアター・オリムピックス」の開催

齊藤郁子

三井グループがスポンサーで電通が「クローズアップ・オブ・ジャパン」という企画をした。日本の芸術を海外に紹介する催しだった。SCOT が参加したのはロンドン公演で、その時は、忠さん（鈴木忠志）や小澤征爾さんの公演でした。そこから日本に海外の芸術を紹介する三井グループがスポンサーの「三井フェスティバル」へと発展して、忠さんがその芸術監督になった。その「三井フェスティバル」の何回目かに、ギリシアのテオドロス・テルゾプロスを呼んだ時、赤坂の地下のさえない食堂で、テオが「シアター・オリムピックス」がやりたい、と言ったんです。それはいいアイデアだね、よし、手分けして連絡しよう、ということで、アメリカのロバート・ウィルソン、ドイツのハイナー・ミュラー、ロシアのユーリ・リュビーモフなどの名前を挙げて、テオと忠さんが分担して連絡をした。

当時、テオは危機感を抱いていた。米ソの冷戦が終わって、これからは希望が持てる世界になるのではないかと思っていたら、逆に東欧だとか、ギリシアに近いあちこちで民族紛争が噴出していた。そうしたなかで、演劇人は連帯して人類の未来のために頑張らなくてはいけない、と。こうした感覚というのは、やはり日本にいと鈍くなります。鈴木は、多くの海外の人たちともつきあっているんで、そうした問題意識も実感としてわかるころがあったのだと思う。連絡を受けたハイナー・ミュラーやリュビーモフなども、それは凄い、やろう、ということになって、93年の夏にデルフォイに集まって「シアター・オリムピックス」を創設したわけです。世界には演劇祭という名のつくものはたくさんありますが、だいたい、プロデューサーがいて、スポンサーがいて、かれらがビッグ・ネームの芸術家を並べてアドヴァイザーにしているものがほとんどです。これではだめだ、と。芸術家自らが行動を起こした、というようにしなければだめだ、と鈴木は主張した。自分の作品を上演するためにお金を集め、ファンドレーズは自分でやろう、そういうコミットメントを自分たちでやらなければ、インパクトのある事業はできない、と。それで憲章をつくらうということになって、みんなでああだこうだとやりながら、一晩でつくった。シアター・オリムピックスのロゴは、美術家としても活躍しているロバート・ウィルソンがその場でデザインし、サブ・タイトルの Crossing Millennia(千年紀を過ること一過去と未来の相互交流を意味する)は、劇作家・詩人でもあるトニー・ハリソンが考え、マニフェストも彼が書いた。

それで、シアター・オリムピックス国際委員会の委員長となったテオと私が訪ねて行って皆さんに声をかけて、メンバーが揃ってサインしてもらって発表したのが94年です。第一回は95年に、ギリシアのデルフォイを中心にして、アテネとエピダウロスでも開催した。このときは、マニフェストと一緒に委員たちの作品を発表しました。

イギリスのトニー・ハリソンがやったところは、第一回の開催までに建設する予定だった野外劇場が全然できていなくて、穴を掘っただけの状態だった場所でした。トニー・ハリソンは、これこそがいいんだ、と言ってね。その穴を掘ったところで、『ヘラクレス』を上演

した。ヘルメットをかぶった工事現場の人たちが掘削作業をしていると、人形が出てくる、そこから神話的世界と現代世界の問題が重なるように立ち現れてくる、というような作品だった。ちょうど、ヘラクレスという名のセメント会社があったので、その社名の入ったコンクリート・ミキサーを借りてきてやったものだから、ブラック・ユーモアにもなっている。それを、観客は崖の上に座って観た。本当に面白かった。

古代競技場は一つしかありませんが、そこでは鈴木のほか、ロバート・ウィルソン、ハイナー・ミュラーなどが上演した。みんな照明に凝る人たちなのに、長くても一晩半くらいで仕込まなきゃならないから、もの凄く大変だった。テオは、その前にエピダウロスで上演した。鈴木はオープニングをアテネのヘロデオン野外音楽堂で『ディオニュソス』をやって、それから古代競技場で『エレクトラ』を上演した。リュビーモフは、教会みたいな建物の中のプールで、しかもギリシアの学生を使って作品をつくった。

あのころ、みんな何歳くらいだったのかな、忠さんは50代半ば過ぎだから、リュビーモフは80少し前かな。みんな若々しくて青年みたいだった。それでディスカッションもやって、これはNHKがETV特集で、テオと鈴木の、なぜ演劇なのかをめぐっての議論に、ほかの参加者のインタビューと上演作品の記録を加えて放映した。これも画期的な番組でしたね。

それにしても、あの古代競技場へ行く道というのは利賀より大変でね。曲がりくねった山道をのぼっていくと、木の柵でできている扉があり、そこからまたクネクネした急坂を登ると、やっと古代競技場に出る。ロバート・ウィルソンが上演したときには、照明に時間がかかって、なかなか開演できない。観客は、9時の開演なのに、夜の12時ころまで木の柵のところで待機していた。私は、高橋康也さんと中村雄二郎さんたちと一緒にいたんですが、高橋さんは肺の手術の後で息が十分に入らないということだし、雄二郎さんもなんか身体の具合が悪くて、この二人がとても心配だった。なにしろ、グューグューのお客さんと一緒に、ただ泥道に立っているだけだから。それで、テオが来たら、なんとかこの二人だけは、中に入れて座らせてあげたいと思っているんだけど、テオは見つからないし、ギリシア語じゃどうにもならない。雄二郎さんがフラフラしてきたんで、先に崖っぷちのところに連れて行って一休みしてもらった。そしたら、康也さんが、私こそ空気がないんですよ、と。はいはい、ごめんなさい、といってまた康也さんを連れ出す(笑)。それで、周りを見渡すと、80歳くらいのお客さんは一杯いるわけ。だから、私たちだけ特別扱いというのはできなかったんでしょうけど。ボブ(ロバート・ウィルソン)のは、時間通り始まらないというのは定番だけど、ちょっとあれは怖かった。

夜中の二時ごろに終演して、街中に降りてゆくと、レストランがまだ営業している。鈴木劇団はレストラン\*\*、ボブのところはレストラン\*\*、というように割り当てて食事ができるようになっている。そうするとレストラン同士が情報交換するわけです。どうも、鈴木が一番だ、鈴木が一番だってみんなが言っていると、オーナーが興奮してワインを差し入れてくれる。そういうところも、フランスのナンシー演劇祭の時もそうだったけれど、街中が

ワーッと盛り上がって面白かったですね。

で、その時に、もう二回目は静岡でやろうと決めていたし、静岡で開催するときは、シスター・オリंपピックスの委員の作品だけではなく、ほかの演出家の作品も上演しましょう、ということになった。それで第一回目のギリシアには、静岡県知事が来たし、そのほか遠山敦子文化庁長官、総務省（当時は自治省）の石井隆一さん、富山県、利賀村の人たちもやってきた。一回目のときには、もう二回目が動き出していたし、静岡での二回目のときには、三回目のモスクワが動き出していて、その関係者が大勢来ていました。

（「SCOTの軌跡を語る」より）